

海外交流

ハラタマワークショップ

—持続可能な社会をめざす化学と化学技術—

芝 哲 夫*

Gratama Workshop 2000
—Chemistry and Chemical Technology for a Sustainable Society—

Key Words : Dr. K. W. Gratama, 400 Years Japan-Netherlands Energy and Environment, Precision Chemistry and Catalysis, Green Chemistry

日蘭交流400周年を記念して、幕末から明治にかけて来朝したオランダ人化学者ハラタマKoenraad Wolter Gratamaの名を冠した化学会議ハラタマワークショップが2000年4月21日(金)から25日(火)まで大阪大学銀杏会館において開催された。西暦1600年4月19日にオランダ帆船デ・リーフデ号が豊後臼杵に漂着して、日蘭交流が始まってから今年はその400年目に当たるというので、この日の前後をオランダ週間として日本各地で種々の記念事業が展開された。

ハラタマワークショップはその一環として、オランダデルフト工科大学J.de.Swaan Arons教授の提案により、オランダ王立科学芸術アカデミーおよびオランダ大使館の強力な支援を受けて、大阪大学、通産省工業技術院大阪工業技術研究所が中心となる日本側の組織委員会が結成され、その準備、執行の任に当たった。主催：大阪大学、共催：通産省工業技術院大阪工業技術研究所、オランダ科学研究機構、オランダ貿易経済省、オランダ総領事館、デルフト工科大学、後援：日本化学会、化学工学会、日本薬学会、近畿化学協会、オランダ王立科学芸術アカデミー、日蘭交流400年記念オランダ委員会、ハラタマ財団で行われた。

このワークショップ開催の趣旨は、日本の化学の発足に当り多大の貢献を果たしたハラタマ博士を顕



写真1 ハラタマワークショップ参加者
大阪大学銀杏会館

彰するとともに、ハラタマにより日本に導入された化学が来るべき世紀に人類が維持可能な社会を持続するためにいかなる貢献と役割をなさねばならないかという視点に立って、日蘭両国が共同して新しい化学の進め方を探求しようというものである。

ハラタマは慶應2年(1866)に幕府の招聘によって、長崎の分析究理所に着任したが、翌年江戸に開設予定の開成所内理化学校に赴任のため江戸に移った。しかしその開校前に幕府が崩壊したので、明治2年(1869)明治新政府によって大阪に創設された舎密局(せいみきょく)の教頭として迎えられた。この舎密局においてハラタマはそれまでの日本では書物を通じてしか知る由がなかった西欧理化学を講義と実験により直接に日本に移植しようと尽力した。このハラタマの影響を直接、間接に受けた者の中から日本の化学の開拓者達が輩出した。アドレナリン、タカジアスターゼを発見した高峰讓吉、日本人化学者として最初にドイツに留学した松本銈太郎、日本の薬学の先覚者長井長義、京都舎密局を開いた明石博高、



* Tetsuo SHIBA
1924年6月17日生
昭和21年大阪帝国大学理学部化学科卒業。大阪大学名誉教授
現在、(財)蛋白質研究奨励会・ペプチド研究所所長、理学博士、生物有機化学
TEL 0727-29-4799
FAX 0727-29-4124
E-Mail shiba@prf.or.jp

大蔵省印刷局舎密局長となった岸本一郎，大阪衛生試験所所長となった村橋治郎，味の素を発見した池田菊苗などの名を挙げるができる。

ハラタマワークショップの開会式は4月22日に大阪中之島の大阪府国際会議場で，オランダのウイレム・アレクサンダー皇太子をはじめとして日蘭両国の多くの来賓を迎えて行われた。岸本忠三大阪大学総長の開会の辞に続いてN. de Voogtデルフト工科大学学長の挨拶，A. Jorritsmaオランダ副首相の“Sustainable Relations in Science and Technology between the Netherlands and Japan”および芝委員長の“Koenraad Wolter Gratama, Founding Father of Chemistry in Japan”の記念講演が行われた。それに続いて彫刻家川合敏久氏により制作されたハラタマ博士胸像の除幕がオランダ皇太子と大阪大学総長の手で執り行われた。この除幕式にはハラタマ博士の曾孫夫妻が招待されて出席した。なおこの胸像は今秋に大手前の舎密局址の碑の傍に

設置される予定である。

ワークショップの会議には日本側から52名，オランダ側から42名が参加出席して，A)エネルギー，環境と化学技術，B)精密化学と触媒，C)グリーンケミストリーの三つの主題について発表，討論が行われた。グリーンケミストリーとは自然環境と共生したものづくりを基本とする化学の考え方である。たとえば，化学合成を行う場合に有害な試薬は使わない。廃棄副産物を最小限に抑える。リサイクルを含めた資源の有効利用を目指す。生産段階での化学反応に有害な溶媒の使用を避けるなどの方針で化学工業を再構築しようという化学の課題である。特別講演としては日本から10題，オランダから12題の演題が出された。ポスターセッションには日本から26件，オランダから27件が出され，各自2分間づつの口頭発表も行われた。それらの発表については既に149頁の要旨集が発行されているが，より詳細な報告集も刊行の予定である。

両国参加者の交流を深めるために，4月22日には参加者全員が適塾を見学した後，大阪南港に繋留中の威臨丸上で開かれたレセプションで親睦を深めた。また21日のバンケットの席上でオランダ王立科学芸術アカデミーからハラタマ賞が芝委員長に贈られた。

ハラタマワークショップは今回限りではなく，今後も3年毎に日蘭両国で交互に開くことが決められた。次回は2003年にオランダのユトレヒトにおいて開催される予定である。

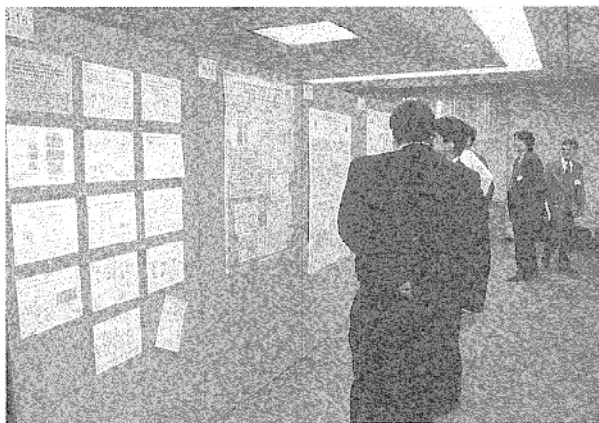


写真2 ハラタマワークショップ
ポスターセッション風景



写真3 ハラタマ胸像除幕式
アレクサンダー オランダ皇太子と
岸本大阪大学総長 大阪府国際会議場

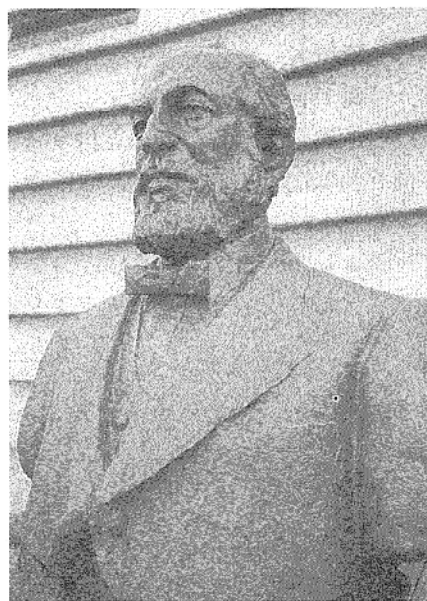


写真4 ハラタマ胸像